

## 私にとって版は「セイブツ」 一村上早と銅板一

村上自ら専門とする銅版画の技法を以下のように説明する。「腐食は腐敗であり、版上の傷は人体と心の傷、紙に刷り取れるインクは血である。」

(『画廊からの発言 新世代への視点 2016』東京現代美術画廊会議、2016年)

また、2019年に開催された上田市立美術館での個展の際には、そこからさらに発展し、「銅の版は‘人の心’、付ける傷は‘心的外傷’、傷に詰めるインクは‘血’、それを刷り取るための紙は‘ガーゼ、包帯’」とも語っている。

(中村美子「ネガティブを昇華させる村上早の強さと覚悟」『gone girl』2019年、74-75頁)

村上と話をしていると、最終的な作品として刷られた紙よりも、むしろ銅板自体が彫刻作品なのではないかという錯覚を受ける。村上の作品を語る時、必ずと言っていいほど、彼女が4歳の時に受けた心臓病の手術の話が出てくる。その手術によって受けた精神的恐怖のせいで（おかげで）、大人になるまで夜から朝の境界が怖くて、家族と同じ屋根の下でなければ、朝を迎えることができなかったという。東京の大学に進学した後も、学校のアトリエで早朝から夜まで作品制作の作業をしても、かならず高崎の

自宅に帰宅することはかかさなかった。この夜への恐怖は、幼い頃に傷ついた心のなかに常にトラウマとして存在したのだ。

大学3年生の時に偶然に銅版画という技法に出会い、作品を制作するようになると、少しずつ銅板と自分自身を重ね合わせるようになる。ただ、それはぴたりと合うものではなく、ある種の共依存的な存在ともいえる。銅版画は、村上がいなければ作品として存在しないが、村上自身も銅版画に依存している。村上はこうも述べる、「銅板は、常にそこにおいて、手を差し伸べてはくれないけれど、手をつかんでくれというと、手をつかんでくれる」。彼女が、幼少期のトラウマと共に生きていく覚悟ができたのは、きっとこの技法との出会いによるところが大きい。銅板に傷を刻むことで、彼女自身は確実に治癒されているのだ。



村上のアトリエに大切に保管されている銅板たち